

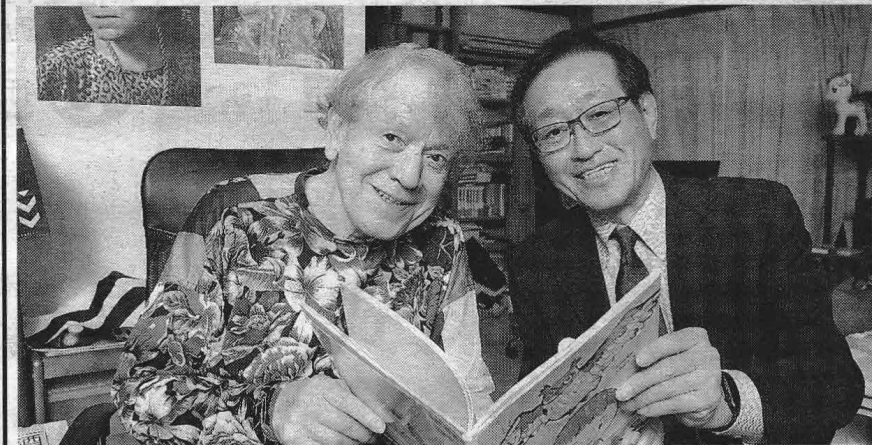
3・11後の読み聞かせで「これからどうなるんだろう」とつぶやいた少年

少年がいた一方、なおさら不安が募ってしまっただけでしょうね。志茂田 当時の枝野官房長官は事あるごとに「現時点では」と言っているが、ああいう言葉に子どもたちはピンとくるのです。ネット情報や友達との知識の交換などを通して子どもたちは親よりもよほど詳しい。「大丈夫だよ」と子どもの肩をたいてあげましたけれど、不安は解消できなかったでしょう。ただ、悲観することはないと思います。そうした不安、あらゆる種の緊張感を抱えながら成長していく中で、彼らはのんびんだらりと大きくなっていく子どもたちよりもはるかにレベルの高い社会人になるんじゃないかと思っています。

二木 啓孝の 一服一話[®] ゲスト作家 志茂田景樹さん

二木 1900回を超えている読み聞かせ活動では、いろんな被災地も訪れ、被災した方々を励まされたいかがっています。志茂田 被災地を初めて慰問したのは福岡県西方沖地震（2005年）の時ですね。福岡市の避難所になっていた九電記念体育館で僕の『ぞうのこ

どもがみたゆめ』の読み聞かせを行いました。この物語は別れの場面が出てくるので、最初はまずいかなと思ったのですが、先入観を入れないでいつものようにやるべきだと思いつき、この作品を含め3作やりました。やはり、『ぞう』を聞いて泣く子が一番多かった。まずかったかな、と思ったのですが、子どもたちが近づいてきて僕の手を握って放さない。「ひとりになってもしっかり生きていくんだよ」という作品のメッセージが伝わったんだな、と安心しましたね。



かれましたか。志茂田 東北には3・11以前から何度も足を運んでいます。岩手県の大船渡市に三陸町（合併前は気仙郡三陸町）という町があります。02年、03年と2年続けて講演会と読み聞かせを行った場所です。3・11後に旧三陸町の小学校で読み聞かせを行った後、子どもたちと一緒に被災地から避難して来た人々がいた所です。ここでは『ぞう』の話などの読み聞かせの後に、僕の絵本に名前と「いまが出生点」といった添え書きをして参加してくれた子どもたちに差し上げました。『ぞう』の物語に背中を押されました」と生きたのですね。親から連

れて行ってもらったことを聞いて覚えていたのでしょう。二木 被災地の子どもたちと向き合われてどんなことを感じられましたか。志茂田 3・11の翌月、栃木県内に20カ所設置された避難所のうち4カ所の小学校で読み聞かせを行いました。すべて原発地区から避難して来た人々がいた所です。ここでは『ぞう』の話などの読み聞かせの後に、僕の絵本に名前と「いまが出生点」といった添え書きをして参加してくれた子どもたちに差し上げました。『ぞう』の物語に背中を押されました」と生きたのですね。親から連

他の被災地の子どもたちとは明らかに違う不安

う、僕ら」とつぶやいた少年がいました。このつぶやきは印象的でした。二木 将来への不安が思わすつぶやきに出してしまったのでしようね。志茂田 同じようなつぶやきは九州でも山古志（新潟県の中越地震）でも聞いたと思いますが、それは「友達と一緒に通学できるのかなあ」といった不安と期待、希望が入り交じったものだった。でも、栃木の避難所の少年のつぶやきには不安しかありませんでした。放射能による影響が将来どう出るのか、という大きな不安なのです。二木 正確な情報が発信されませんでしたから、